**寄　稿**

**Steeple Aston を訪ねて**

**金子　容子**

　1992年夏のことでした。マードックご夫妻はすでにオクスフォード市に居を移されていました。それでも、彼女が多くの作品を執筆したSteeple Astonの「杉の館」を一度訪ねてみたいと、私は思っていました。

　英国のオクスフォード市から北に40分、私は、尋ねながら、また尋ねながら、バスを乗り継いでやっとSteeple Astonに到着しました。
　「ここです。」と言う運転手の言葉に促され、不安を胸に私はバスを降りました。通りかかった土地の方に、「マードックの家に行きたいのですが。」と尋ねると、「この道なりに、歩いて行きなさい。」と、よく知っているという様子ですぐに教えてくれました。どの観光用地図にもSteeple Astonという記載はなく、オクスフォード近郊地図を購入してやっと見つけたSteeple Aston という小さな文字だけを頼りに、留学先のオクスフォードから一人出かけてきた緊張感が、その言葉を聞いて急にほぐれていきました。
　マードックの家に至る道は、『一角獣』に登場する冒頭の場面を想起させるものでした。海岸沿いでこそありませんが、マリアンが「ゲイズ館」に赴任するあの場面を彷彿とさせるものでした。例えば、こんなことがありました。牧草地の間に一本の道が曲がりくねりながら続いていました。途中、廃屋が苔むした石塀の中にありました。ゴシック風の教会がありました。小さな沼地がありました。向こうから、若く美しい女性が馬に跨りやってきました。その女性は靴から服まですべて乗馬用の出で立ちで、凛として私の横を通り過ぎていきました。一台のランドローバーがガタガタと通り過ぎていきました。

　辿り着いたマードックの家は、豪壮な構えを擁していました。前庭には杉の大木が勇壮にそびえていました。裏庭には、広大な庭園とそれに続く森林が広がっていました。
　庭園は、森林に向かってやや傾斜し、それに沿って芝が美しく生えていました。芝生の所々に花々が寄り添って咲いていました。バラがあり、インパチエンスがあり、ベゴニアがあり、ロベリアがありました。さらに、レースラベンダーがあり、ゆきのしたもあり、多肉植物もありました。
　庭園の向こうには、深い森が続いていました。私が立ってみていると、突然けたたましい鳥の奇声が聞こえてきました。そして、その奇声が消えると、再び森の静寂が戻ってきました。トガリネズミが襲撃されたのでしょうか。この森では、『四季の鳥』に描かれた鳥の世界が繰り広げられていることでしょう。今ひと時の森の静寂は、『四季の鳥』の7月の場面でしょうか。黒歌鳥が機械的な動きを止め、じっと動かなくなりました。黒歌鳥がこれから襲撃する小さな餌食たちが立てる音を、じっと聴いているのでしょうか。あくまでも、あたりは、静かでした。

　マードックの『四季の鳥』に描かれた詩的宇宙は、彼女のこれまでの膨大な小説群と比べると、全体に抑制が効いた静かな空間です。Steeple Aston の杉の館に立ち、私はそれを確認していました。

　マードックは、Steeple Aston において多くの作品を執筆したと言われます。Steeple Astonでのマードックの世界には、美しい庭園と、深い森林と、豪壮な建物と、長い小道が用意されていました。都会の喧騒から隔離されたマードックの小宇宙が厳然と存在していました。